



門へ達18  
1898  
7

坂田金平志平記卷之七

目録

一 逢難風源あてえんちゅうげん 志平しへい 鬼満おにまん 四事しじ

一 公平持寶珠こうへいぢほうしゆ 帰日本かへにほん 事こと

一 廣長ひろなが 及及び 送おく 付つけ 頼義よりよし 流なが 刑けい 事こと



坂田金平を平記卷之七

逢難風源之鬼伝事

寛治二年の春柳西有て公平西園は新く久保者少く  
 運難波乃浦より船も亦支障を箱万里に雲に  
 倉海況々して月も此波小入る事と云くして月  
 東南の天よあきば海舟の蹄を足く一灯柳を小幽  
 有り海邊に浦り入はかり村は軽重なる事記  
 乃高橋浦に写影群居臨立波は偏くして深なる  
 く海煙の紙坪をもるをば伊の島との追はれ送  
 らせり秋のまれの増も月を鳴鹿の沖よりも生駒此嶽





乙平のうしと侍女若は後とけ反ふそのころ大老力を  
 横へりらると眩ぐ扣ら。遠は有て頭毛へ前乃常とい  
 たりくく眼精朱のめく光のりて後此羅を乞へて  
 佩らる若乙平が前ふあり。もとくく門内と指し事爰  
 喚く言終へ更は毎せと乙平奥へ毎通とい事ぞと  
 推してはまといゆぐつ心ふへ通と。一の横間ありを  
 親奇藤とい事も形く。石ときて階と。大木と捨の  
 めて柱梁といとらる。七八年中ありて又指し事いふ  
 主事と座と居る。時乙大木虎の皮は袴とおか  
 上は役指有て是ぞ鬼まき。そりてそ長かんらる

斗ぬが髪髪よりあかりて肩をこ。七宝の紫巾冠と袴を  
 腰は腰帯と挿ら。蜀江の珠乃前斗から入袴と云い  
 石は帯と毎ら。主事と袴と。劔乃指と風風ありて  
 紅の房とむとびける。髪と座あり。主指乃帯は裏  
 ころ女房二人は後き小との動くゆら。袴は袴のしん  
 すと来る。主風凜く。て汗息燭と吐く。若乙平は向  
 くと大書あり。時て曰。女は是れ杖素州乃去。押我徳ハ  
 海とと離る。教方里を彼漸く。て方角あり。色を  
 人同の事事なり。る成通力とゆく。は士は海り。るぞ  
 主時乙平は押立大老力の様と極て雷れ。く女声をと







身を造りて母を以て傍りし人生の極美を成し仁義  
又善と成りて母を以て傍りし人生の極美を成し仁義  
是を孔壊と名て此法を知りていひくは彼を首角と強  
や執りてさるん怒りしを公平と名馳首を抱て近入る  
そ是より直取送の歸りしをいひくは彼を獅子其面の如  
あるまじく豹虎の窟の如く若し四十八人更く之を  
つと舞蹴て大玉と對りぬと公平もさる夜は酒宴し  
てさるぬしとあり

公平抄宝珠帯日本事

坂田倉原公平の教日鬼は國は遠西にける不破船の如

猶やうく出来たり。意海を以ていひくは解とけ徳也  
ゆんいふこととるなり此舟人海りし験きて公事船のまも  
り不し信るなり。然れ鬼王一切を奪と出守連日我を  
答は夜も事又他念なり。いふ孫とて將も素とて鬼王  
又面し。心を以ていひく。素は公は後一語に承日本事  
附庸とるべき事今不返そとす。此は程は色れ公意と  
月らふ所にて月不降はも人しを公よりけいし入ら  
は意て我捕頭と名いつまはくは捕うん方海路を  
ていしひるまは鬼王守て面白く行とて捕頭と  
らん公平のいさる月不降はも人しを公よりけいし入ら

九井記  
振て勝負とせん。鬼王又とて家分れし人よ始末事とて  
赤標小成庭前は踊かき立て。公平を憐ておまを手にひく  
と継消る。公平の身は長一丈よる。鬼王の威文はわ  
すう大人も小切向く押潰さんと虎の威とをせむ。公平は  
めしおろろお獲のよも。まにひき流て殺し。この例さんと  
すもこのりもしてお月柳子れ遠くをふしてお小原とて流す  
んともそごふよ流るし。大地も刻然と重梅を打りし端  
へく疑ふ。春属をたてとるん。魂と天れに死。まもさう  
け。お言もさゆりして。同位と志めて守居る。鬼王  
つらひて公平が肩先と振て押付んとし。知ら知とつと入る

鬼王の足とれて負投は投まきこつ力いのみしてま遂は  
事と振。是は足と廣て春属とて公平を刺し小原のりて  
おはつとてやとひきこ。鬼王は操りて金はさう中し小  
まごうを流るす。公平春属を紙白眼付己まといふ。並居  
らるおを頭を地は付。大正流系の上は遠背。おはひくと公平  
を合取しける。公平は鬼王と引互殿中ふとらる。鬼王  
公平と上座は信し。公平してやうる。はまよ一乃宝珠あり。  
是と流分ふもつ揚頁の流すべし。はまよ一乃宝珠あり。  
交置后赤標返居乃の竜文よりこの宝珠と貸す。公平  
珠は珠。銀珠と干満の二玉。龍文へゆりし銀珠はひかに

抄りと果奪おそい玉の室に。物たはれ交り  
秀しむ今け玉と奉て鉄くまへし。室居の心より  
物一云平小波なる。去座以是とらふ。方八寸の水晶の浸  
潤方玉の中に七首の鈕けりも。室居入り云平小波  
刻み物乃室守す。鬼王にぬもて。船居小波ひき  
あま波て約居り。物よ遠く。帆柱投十石立伸  
て伸く。船中此人力よ及り。いと。浪あそ。室居  
も眷属と。馬も破際す。立出。し中と。眷属  
のさし。平よりひき。二三十人。立か。あや。く。記  
下も。せ。せ。せ。十。圓。は。修。大。本。る。は。三。九。九。眷。属

左船と。右ら。自。自。と。波。波。て。力。と。何。を。立。ま。さ。や。ふ。あ。り。り。  
云平。是。と。人。教。と。追。返。帆。柱。の。楫。と。行。舟。小。む。と。揚。る。  
曳。と。り。く。も。の。方。を。根。の。方。に。船。乃。門。あ。り。入。る。船。て。船。よ  
家。ら。う。あ。も。と。て。押。さ。る。ふ。う。ゆ。く。力。と。さ。す。も。刀。を。帆  
柱。の。舟。よ。ま。ふ。り。水。更。悦。帆。は。太。ぬ。帆。と。立。可。里。れ  
波。浪。と。一。瞬。み。と。ま。ら。る。鬼。王。眷。属。を。破。て。日。本。小。圓  
と。ん。た。か。る。雷。力。も。有。事。と。駐。死。て。帰。る。  
廣。長。及。逆。付。輕。義。流。刑。事  
云。程。は。船。は。云。平。難。風。は。船。を。引。寄。り。知。り。ど。成。る。中。身。又  
一。云。武。將。と。始。り。四。天。王。法。内。卯。辰。の。ま。を。中。を。あ。り。是。果

とらゆふ。まは系事の號ふといふ變に強款の後も公  
平角て度日は初ね恐らうに。日本乃稀志れゆ来と  
あふ子成りふ。偏は天下の殊くと。乳思れ母を慕うく  
は彼よむそのまきく。子以控大細を廣長とけあわつ。そ  
生貨脊高く。色白面は面像ゆる。恐討の形もも  
聴る。極歎もまきく。言射者我の入麻未事う。世  
奉て西も入麻。再見とも恐らう。お後希等に控態  
入の留現。岩と盤石房被ホ二人。乃此長一丈式尺眼大  
みそ瞳。之まわり。盤態の毛乃。く力事。子業へ。若  
さけ。きだ。た。あ。る。ふ。物。り。魔は。滅。絶。と。て。風。西。に。ゆ。せ

愈と飛せ火を降くと。毛も入麻。後。一。燈。介。乃。龍。天。魔  
王。が。化。現。して。二。夜。は。生。ま。れ。現。し。廣。長。う。家。臣。と。成。れ。と。恐  
まの。若。い。あ。ら。う。ら。う。こ。介。是。石。傳。を。在。為。武。妻。大。乃。吉。孫。六  
は。虎。小。勝。若。後。孫。若。右。白。傳。丈。八。寸。と。い。ふ。一。人。苗。子。乃  
名。何。も。ま。い。ふ。お。め。は。漢。名。は。い。ふ。母。月。才。乃。重。教。機。剛。と  
優。し。た。れ。ど。廣。長。例。乃。希。志。を。と。る。色。一。酒。原。此。喜。う  
お。さ。う。酒。高。し。と。う。越。う。酒。才。結。し。乃。及。て。廣。長。活。中。を  
虎。視。し。と。う。の。有。言。小。誓。お。欣。て。座。り。し。う。席。を。あ。く  
中。乃。へ。あ。く。は。あ。を。知。く。我。先。祖。雷。我。入。麻。之。八。雷。年。活  
是。乃。公。家。也。て。日。本。ふ。ま。と。う。ひ。既。し。事。う。ん。と。せ。し。に。

何れ未だ來らざるは遠く人馬の好中に非ざるは情ををせ  
とせしむる威多のしそなきあまき我を婚結し而も  
世も招か家庭と持たざる區として一生と著さんか  
のひ身たしや。南河公家の月は種子がめと縁はあべ  
くも心かうんは武家の志もあまき。坂田云平死生と  
あまきぬきもて心持一人もねー行くあまき我知中  
とせしめて武持を信刑しそは天玉の好東と討殺し  
自大臣大ねし由て信玉の武士と抜き我威勢は往見  
てくぬあ天玉と捨よせん。得めは母も、昔年の四  
月直縁のふしす人しといひきさす。其時當現縁石と

その内、機姫と何中よんとあまきあまき愛は情とれ  
ぬもくや海流ししし。見山原家此好系が右白貴もかぬ  
らぬ身あり。天玉のそは此掃きといふ。此類かあ人  
臨行後痛撫乃あまき事あまきし。君れは愛あまきとせし  
てあまきあまき。上は押し杉義利あまきの奉あまき。若遠  
よ及若あまき。そらあまき。行指より捕て天玉と捨  
殺しあまき。清は後あまき。ともあまき。いそや。廣長  
くも。あまき。先使宣の法心を信ひおあまき。て信  
し。あまき。も内く。そあまき。とて。若居。投刺の。大は  
信あまき。人のあまき。る。そ。後。廣長。あまき。人。武持の。後。位





一 此海より天皇に南と海と人々大なる死にさしひらるる  
 室有るは慢口を飛と申すは是北の紀の事にして捕らるる  
 徳志の所也。配不たよ知るべき後いふ事あり。返りて奪え  
 一 徳若れ自と紀すふ志形しるる事やと而目と目  
 と目合に延らる所也。坂田公平は殺り置れ風波と浪を  
 返れ。垂ふは所しるる人々出立ひらるるや奪えん  
 先ふらり御りする事さうよそ是ふ付く所く北の事也  
 若因今如也さふ配不たよ知るべき後いふ事あり。奪えん  
 振もさ。部く角てふ所さしひらるる事たを以  
 面目もされおと流と流て下る。公平はて元角の

一言もたぐ 府殿とまき出さるは武徳神よさる。流  
 急の風情たるさすつへりあそ。耐公平眼と流と  
 人新し生れ。後色。若れ耐をい分が事法も浮定もさ  
 へさこ根生背い人々あくと若れ捨と成甘り。子母  
 られた分が立推るふ命と惜しむ。若れははの事実白  
 帝の御りする所し。必抵で提ある。げふ小押録と  
 さふははの事実同つと。さう知事あるんをせくと怒らる。  
 天皇はあて頼るふ事。我もは色同全の事なる。た  
 何事も若れはの事。若れ事と信し人々と人々を奪えん南  
 も計へし平しくし制さるへ公平力なり大時録と事





とらふと平は人々の心とてなする事なれども  
いふは伊が下知よと云ふ。是の言はるるは一度は國を  
てふ偏はれは成程とて合流と流して云々面々  
と押入平の侍は付てと事々の生ゆとありかたの  
勇士と持せり。又おの二船の流をに身と苦めたる  
柄は是れ北の流は世に。我々成程の流は流る。とて  
自てと君はなれは流を流とて。今らよは流は流る。と  
わは二先流の流は流とて。今らよは流は流る。とて  
よ事なを記しきり

坂田合平を事記きし終

